



SANSEIDO'S
DICTIONARY
CURRENT ENGLISH
USAGE

英語慣用法辞典

大塚高信編

SANSEIDO



英語慣用法辞典

定価 1,600 円

昭和 36 年 4 月 25 日 初版発行

© 編者 大塚 高 信

発行者 株式会社 三省堂
代表者 亀井 要

東京都三鷹市上連雀 990
印刷者 株式会社 三省堂三鷹工場
代表者 勝畑 四郎

東京都千代田区神田神保町 1 の 1
発行所 株式会社 三省堂
電話 東京 (291) 1126—9
振替口座 東京 54300

ミタカ製本

(慣用辞典)

序

外国語を学習するときわれわれが参考にする書物は辞書と文法書である。辞書は単語を検索に便利な順序に並べ、各単語について、それが使用されるいろいろな場合にどんな意味を表わすかを記載しており、文法書は、何万という単語が、互いに他の単語と結合して実際に使用される無限のケースの中から、共通した部分を取りまとめ、その国語の全からくりを比較的簡単に整理したものである。だから、昔から辞書は個々の事実を取り扱い、文法は一般的事実を取り扱うと言われている。

われわれが外国語として英語を勉強するときには、辞書としては英和辞書、文法としては英文法書を使用する。英和辞書では、英語の単語を一つ一つとりあげ、それに相当する日本語が与えられている。その語が他のある特定の単語と結合して使われることが多いときにはその結合の例が、たとえば熟語として示され、訳語が与えられている。標準的な発音、文法の一般的な規則にはずれた語については、語形変化（名詞の不規則複数形、動詞の過去・過去分詞など）も記載してある。ところが、単語の数は、その形態上の変化を含め、有限であるのに対し、それを駆使して伝達すべき内容、すなわち物的・心的の世界は無限であるのだから、限りある材料をどんなに使ってみても、限りのない世界を完全に写し出すことは不可能である。したがって、どんな表現でも、いわば間にあわせて用を達しているのが事実である。言葉をかえていうと、言語による伝達・表現には多かれ少なかれ曖昧なところがある。この曖昧性は、概念の構成や、物の考えか

た、見かたを異にする外国人同志の間では、いよいよ大きくなるのが当然である。たとえば「大きい」という観念は、現実の世界ではいろいろな物体の性質であり、いろいろな他の観念と結合して考えられる。それが英語では big, large, great のほかに bulky, voluminous, massive, mighty, huge, immense, stupendous, gigantic, Brobdingnagian などであらわされるが、日本語では「大きい」「偉大な」「壮大な」「巨大な」「強大な」...であらわされる。これらの英語の単語と日本語の単語を比べてみると、その意味がぴったりと重なり合うような語は一つもないばかりでなく、上記英語の単語相互の間にも、「大きい」という共通的な意味は持っていても、各語にはそれ以外の含蓄的な意味がまつわっているから、どの二つを比べてみても決して全等ではない。これらの語は、文法的には形容詞と呼ばれる一群の語類と同じ働きをし、意味的には「大きい」という共通の意味を表示する点では共通の用法を持っているけれども、各語にはそれ独自の意味がまつわっていて、たとえば big が用いられるようなところには、いつでも large が用いられるとは限らぬ。このことを、それぞれの語にはそれぞれ独特の usage があると呼んでいる。

同じことは連語の場合にもいえる。たとえば at night, in the night, by night は、英語の中で同じ文脈に現われることもあるが、互いに違った文脈の中でなくては現われえない、言いかえれば、互いに置きかえることのできない文脈に現われることもある。これをわれわれは「用法が違う」とか「意味が違う」という言葉で呼んできた。usage の違いにほかならない。文法形式についても同様で、たとえば to swim と swimming のような不定詞と動名詞の形は、どちらも like という動詞と結合して現われるが、I like — in this cool pond という文脈では、swimming という動名詞形は事実使われえない。不定詞と動名詞とは、同じ動詞 like と結合するときでも、その他の要素の関係で（上例では in the pond が続くとき）、必ずしも同じ用い方をしない。usage が違うのである。

ある単語・連語・文法形式が持っているそれ独自の用途, すなわち usage は, 一部分それと共通した usage を持つ単語・連語・文法形式と比較するときに最も説明が容易である。欧米で出版されている英語の usage の辞書 (たとえば H.W. Fowler, *A Dictionary of Modern English Usage*; B. & C. Evanses, *A Dictionary of Contemporary American Usage*) やハンドブック (たとえば J.M. Kierzek, *The Macmillan Handbook of English*; P.G. Perrin, *Writer's Guide and Index to English*) は, 英語を母国語としている人々を対象として, 彼らがものを書く場合に犯しがちな誤りを防止する目的で書かれたものであるが⁵, この種のものは, われわれが英語を外国語として勉強する場合にも, 計り知れぬ便宜を与える。

Usage の辞書はたくさんあるが⁶, 記載されている項目の種類は非常にまちまちである。これはやむを得ないことで, 編者はそれぞれ自分の主観によって項目を選んでいからである。私は「日本の英学生として英語を勉強する際に必要だと思えるもの」という大体の基準をたて, 次のような点を考慮して項目を選定した。

A. 主として「類似」に着目して:

- (1) 意味の類似 (REMEMBER, RECOLLECT, RECALL, REMIND; EARLY, SOON, SHORTLY, PRESENTLY)
- (2) 文法形式の類似 (HAVE COME, BE COME, HAVE GONE, BE GONE; IN-, UN-)
- (3) 発音・綴字の類似 (INDISCREET, INDISCRETE; FORGO, FOREGO; GRISLY, GRIZZLY; SATIRIC, SATYRIC)

B. 主として「差異」に着目して:

- (1) 標準語・非標準語の違い (CHRONIC; LIKE)
- (2) 英・米での違い (GRADUATE; PAVEMENT)
- (3) 文語・口語の違い (BACK OF; TIDY)
- (4) formal・informal の違い (INSIDE OF; AREN'T I)
- (5) 現用・廃用の違い (SERAPH; LIEF, LIEVE)

C. 「類似」と「差異」に同時に着目して：

関連語 (ORCHESTRA, STALL, PIT; HARMONY, MELODY, RHYTHM)

D. 書記・印刷上の慣用 (PUNCTUATION; PROOFREADING)

E. その他 (ALLITERATION, AMBIGUITY, MALAPROPISM, NEOLOGISM, NICKNAMES, PATHETIC FALLACY, PEJORATIVE, PEN NAMES, PERSONIFICATION)

要するにこの辞書は、われわれが英語を読んだり書いたりする場合に遭遇するいろいろな困難、すなわち誤解しがちな語、はっきりとその意味のつかみにくい語、陥りやすい文法上の誤りなど、普通の英和辞書や文法書では詳しく扱えないような項目を、上記のような観点に立って集め、説明したものである。さきに編者が世に送った『新英文法辞典』は、英語の共通的事実を説明したものであったが、この慣用法辞典は、個々の単語・連語・文法形式をとりあげているのであるから、これら両者は互いに依存し、相補性格のものであるという意味で姉妹編と呼んで然るべきものだろうと思う。

本書を編集するにあたっては、内外の辞書や文法書に負うところ多大であったことはいうまでもない。原稿の作成は下記の諸氏の好意と努力によって成り、編者は文字通りにそれを編んだにすぎないが、責任はもちろん編者にある。執筆者諸氏は、時間的に分量的に苛酷な注文をおしつけられたにもかかわらず、よくそれを聞き容れて鋭意努力を惜まれなかった。また笈太郎氏は、校正のほかに内容の上でも、絶えず貴重な批評や提言を与えて編者を援助された。索引は岡照雄氏の好意によって作成された。編者はここに謹んでこれらのかたがたに感謝の意を表するものである。

1961 年 3 月

大 塚 高 信

執筆者

荒木一雄

郡司利男

北山顕正

桑原輝男

水鳥喜喬

興津達朗

宇賀治正朋

中条和夫

林 栄一

小西友七

榊矢好弘

森塚文雄

大沼雅彦

若田部博哉

江川泰一郎

飯塚 茂

日下部徳次

三井高敬

小笠原林樹

大山敏子

安井 稔

例 言

1. 索引

項目の中には、便宜上いろいろのものを概括して述べたり、類義語など是一个所にまとめて説明したものもあるので、検索の便宜をはかるため、巻末に詳しい索引を添えておいた。求める語が見出し語として見出し得ないときには、この索引を利用されたい。

2. 文法用語

説明に用いた文法用語は『新英文法辞典』による。

3. 項目内の下位区分

(1) 同一項目内の下位区分は：

A. B. C. D.

(1) (2) (3) (4)

(a) (b) (c) (d)

1) 2) 3) 4)

a) b) c) d)

(2) 条目列記のときには i) ii) iii) iv) または a) b) c) d) を用いる。

4. 相互参照

相互参照には  の符号を付し、見出し語となっている項目は小頭文字で示す。項目全般に関し他を参照することを示す場合には、その項目の最後に改行、一字おとして  を付けてある。あるパラグラフだけについて他を参照することを示す場合には () とし、その項目が一パラグラフから成る場合には () は付けない。

5. 用例・引用文の出典

用例には原則として出典を示すことにしたが、ときに他書から転用したため、出典の不明な場合には、作者名、または借用書名だけを示したところもある。出典作品の略称は語学書・辞書を含め、『新英文法辞典』の「引用文献」の表 (pp. 1007—1029) に準拠した。著書・雑誌は斜体字 (邦語のものは『』), 論文は ‘ ’ (邦語のものは「」) で示した。巻数はローマ数字, 号数・セクション番号・ページ類はアラビア数字で示す。

6. 略語・略称

本辞典に使用した略語と頻繁に引用される辞書・語学書の略称は下に掲げた通りである。この表に出ていない略称の full title は巻尾の「引用文献」を参照されたい。

略 語・略 称 一 覧

ABC = <i>An ABC of English Usage</i> (Treble & Vallins)	etc. = <i>et cetera</i> (and so forth)
ACD = <i>The American College Dictionary</i> (Barnhart)	F = French
ADD = <i>American Dialect Dictionary</i> (Wentworth)	f. = and the following ~
AEU = <i>A Dictionary of American-English Usage</i> (Nicholson)	ff. = and the following ~s
CAU = <i>A Dictionary of Contemporary American Usage</i> (B. Evans & C. Evans)	G = German
CDD = <i>Comprehensive Desk Dictionary</i> (Barnhart)	Gk = Greek
cf. = <i>confer</i> (compare)	Gmc = Germanic
chap. = chapter	Harrap = <i>Harrap's Standard French and English Dictionary</i> (Mansion)
COD = <i>The Concise Oxford Dictionary of Current English</i>	Hornby = <i>Idiomatic and Syntactic English Dictionary</i>
Crabb = <i>Crabb's English Synonymes</i>	<i>Ibid.</i> = <i>ibidem</i> (in the same book or passage)
CUA = <i>Concise Usage and Abusage</i> (Partridge)	Id. = <i>idem</i> (the same writer)
DA = <i>A Dictionary of Americanism on Historical Principles</i> (Mathews)	i. e. = <i>id est</i> (that is)
DAU = <i>Concise Dictionary of American Grammar and Usage</i> (Whitford & Foster)	<i>International</i> = <i>Webster's New International Dictionary of the English Language</i>
E = English	L = Latin
e. g. = <i>exempli gratia</i> (for example)	l., ll. = line, lines
Eng. = English	Leonhardi = <i>Dictionary of English Grammar</i>
EPD = <i>Everyman's English Pronouncing Dictionary</i> (Jones)	Lindkvist = <i>Studies on the Local Sense of the Prepositions IN, AT, ON & TO in Modern English</i>
	MAU = <i>A Dictionary of Modern American Usage</i> (Horwill)
	ME = Middle English
	MEU = <i>A Dictionary of Modern English Usage</i> (Fowler)

ModE = Modern English	POD = <i>The Pocket Oxford Dictionary of Current English</i>
Myers = <i>A Guide to American English</i>	pp. = pages
N.B. = <i>nota bene</i> (note well)	Pt. = part
<i>New World</i> = <i>Webster's New World Dictionary of the American Language</i>	Sh. = Shakespeare
No. = <i>numero</i> (by number)	Skt = Sanskrit
OE = Old English	SOD = <i>The Shorter Oxford English Dictionary</i>
OED = <i>The Oxford English Dictionary</i>	s. v. = <i>sub verbo</i> (under the word)
p. = page	Synonym = <i>Webster's Dictionary of Synonyms</i>
Palmer = <i>A Grammar of English Words</i>	UAA = <i>Usage and Abusage</i> (Partridge)
PDA = <i>A Pronouncing Dictionary of American English</i> (Kenyon & Knott)	UED = <i>The Universal English Dictionary</i> (Wyld)
PE = Present-day English	

聖 書 の 略 称

<i>Acts</i> = Acts	<i>Heb.</i> = Hebrew
<i>Amos</i> = Amos	<i>Hos.</i> = Hosea
<i>1 Chron.</i> = Chronicles, I	<i>Isa.</i> = Isaiah
<i>2 Chron.</i> = Chronicles, II	<i>James</i> = James
<i>Col.</i> = Colossians	<i>Jer.</i> = Jeremiah
<i>1 Cor.</i> = Corinthians, I	<i>Job</i> = Job
<i>2 Cor.</i> = Corinthians, II	<i>Joel</i> = Joel
<i>Dan.</i> = Daniel	<i>John</i> = John
<i>Deut.</i> = Deuteronomy	<i>1 John</i> = John, I
<i>Eccles.</i> = Ecclesiastes	<i>2 John</i> = John, II
<i>Ephes.</i> = Ephesians	<i>3 John</i> = John, III
<i>Esth.</i> = Esther	<i>Jonah</i> = Jonah
<i>Exod.</i> = Exodus	<i>Josh.</i> = Joshua
<i>Ezek.</i> = Ezekiel	<i>Jude</i> = Jude
<i>Ezra</i> = Ezra	<i>Judges</i> = Judges
<i>Gal.</i> = Galatians	<i>1 Kings</i> = Kings, I
<i>Gen.</i> = Genesis	<i>2 Kings</i> = Kings, II
<i>Habak.</i> = Habakkuk	<i>Lam.</i> = Lamentations
<i>Haggai</i> = Haggai	<i>Lev.</i> = Leviticus

例 言

Luke = Luke
Mal. = Malachi
Mark = Mark
Matt. = Matthew
Mic. = Micah
Nah. = Nahum
Neh. = Nehemiah
Num. = Numbers
Obad. = Obadiah
1 Pet. = Peter, I
2 Pet. = Peter, II
Philem. = Philemon
Philip. = Philippians
Prov. = Proverbs

Ps. = Psalms
Rev. = Revelation
Roms. = Romans
Ruth = Ruth
1 Sam. = Samuel, I
2 Sam. = Samuel, II
Solom. = Song of Solomon
1 Thess. = Thessalonians, I
2 Thess. = Thessalonians, II
1 Tim. = Timothy, I
2 Tim. = Timothy, II
Titus = Titus
Zech. = Zechariah
Zeph. = Zephaniah

目 次

序	iii
例 言	xi
英語慣用法辞典	1
引 用 文 献	1261
A. 語学書・辞書	1261
B. 作 品	1265
索 引	1277

SANSEIDO'S DICTIONARY OF CURRENT ENGLISH USAGE

A

a, an (1) A historical and an historical:
子音の前では a, 母音の前では an: a European/a one-horse town (ちっぽけな町)/a historical novel, a hotel, a university // an umbrella, an hour, an honest man. 不定冠詞の a, an は [OE] ān にさかのぼり、強勢のあるものは [ME] on [ɔ:n] > [Early ModE] [o:n] を経て今日の one となり、強勢のないものは ME an となって、14 世紀ごろからいわゆる冠詞としての用法が確立したものであるが、ME の後期から ModE の初期にかけて子音の前では語尾の子音 n が落ちて a となった。Shakespeare や聖書では an hundred/an hill/an union/an eunuch/such an one など強勢のある語頭の h- や u-, eu- および one の前でも an を付けた例が多い。このうち one は当時の発音は [o:n] であって、今日のような発音はまだ一般的ではなかったことによるものと考えられる。聖書でも such an one のほうが such a one よりもはるかに多く、その影響からこの成句は近代でも多く使われる [市河三喜『英文法研究』pp. 1-6]。強勢のある h- の前に an を使った例

は Chaucer 以来 19 世紀まで見られ、ことに an hundred は 19 世紀の終わりごろまで見られる。強勢のない h- の前では an historical novel のように an とする人が今でもある [Jespersen, *M.E.G.* VII. § 12.2₅ f.]. これも古くは h- を発音しなかったためであると考えられる。強勢のない語頭の h- が脱落したことを示す綴字は既に 13 世紀から見られ、強勢のある音節でも 14 世紀から 18 世紀ごろまで見られる。その後 18~19 世紀の文法家も語頭の h- が脱落することを認めており、今日でもイギリスでは北部の一部を除いて他の方言ではどこにでも見られる現象で、これを発音するようになったのは最近数十年来のことであって、おそらく学校教育によるものと思われる [Wyld, *Colloquial* p. 204 ff.]. Jones の発音辞典によれば、今日でも historic, -al, -ally など強勢のない場合には文頭以外では時に [is-] となる。しかし書く場合には今日では強勢のない場合でも a historical work/a hotel のようにするのが普通で、これを an とするのは上述したような文語の伝統の影響によるものである。Fowler (MEU) は今日では強勢のあるなしによる区別は街学的となったと言っている。アメリカでも Leonard 調査では an historical novel は確

立した用法と考える人が多かったという結果を示しているが, Nicholson (AEU) によれば *an* habitual topic/*an* historical novel/*an* hotel のうち, 初めの二つは今もなお話し言葉としては広く行なわれているが, 書く場合にはそれほど行なわれていないと言い, 一般に *h* が発音される今日では *an* とするのはいたいの場合術学的または懐古的であると言っている。Language Learning (June, 1958) にはミシガン大学で行なわれた英語教育研究会の討論の速記が載っているが, その中に語学者の Trager の言葉として *an* historical note となっていることに対して, 同じ雑誌の IX. 1-2 (1959) に, 当の Trager 教授が抗議文を載せて「私はこのように発音される *h* の前で *an* と書いたこともないし, 今までに書いたこともない」と言い, 編集者はこれは雑誌の書式 (style-book) の問題であったので, そのように改変したことを御容赦くださいと言っている。この問題の一面を物語る挿話である。uniform, union, university, European, eunuch など *u*-, *eu*- の前に *an* を使った例は 19 世紀まで見られるが, これも古くはおそらく今日の [ju:] となる前の発音によったものと思われるが, 後世の例はその伝統によったものか, または [j] の子音的性格が弱いことによるものであろう [Jespersen, M.E.G. VII. § 12.2].

(2) Once *a* week/sixpence *an* ounce/*a* penny *a* mile などの *a* は, 元来は *on*, *in* の意味の OE の前置詞 *an* に由来するもので, 古くは時に関してのみ用いられたが, 後これが拡張されて今日のように空間・数量・重さなどにも用いられるようになったものである。今日では不定冠詞の 1 用法と感じられ, さらにその前に前置詞を付けて *ten times in a day* のようにいうこともある。また *six dollars the bushel* のように *the* とすることもあるが, これはもとフランス語から借用した語法で, 自然の英語としては *a* のほうが好

まれる [Evans, CAU].

(3) *A little, a few, many a*: There is *a little* time left. (まだ時間が少しある)/ There is *little* time left. (もうあまり時間がない)// *A few* (people) were there. (数人はいた)/ *Few* were there. (あまりいなかった)。In *a very few* years all will be changed のような場合には *a very few* とすることができるが, *an extremely few* はその意味上不可。また (*A very few* were there のような場合は, あまりいなかったという意味であるから *a* のないほうがよい [MEU] (☞ FEW). *a great many/a good many* は確立した成句であるが, *a good few* はおどけた言い方または口語 [MEU]。『*many* (and *many*) *a*+名詞』は「いくつもいくつもの」で, 動詞は単数形をとる: *Many a man* has made the same mistake. (同じ失敗をした人は幾人もある)。ModE の初期に見られる I do know *a many* fools.—Sh., *Merch. V. III. v. 72* のような言い方は, 今日では古語または卑語。

(4) 語順: *What a beautiful flower!* / He is *such a* hard worker that he is always at the top of his class. / He is *quite a* scholar. / He stayed there *quite a* (または *a quite*) long time. (☞ QUITE) / It was *rather a* (or *a rather*) coarse joke. (☞ RATHER) / He ran *half a* (or *a half*) mile. (☞ HALF) / He is *no more a* god than we are. (彼是我々と同様神ではない)/ He is *no less a* person than the prime minister. (紛れもない首相だ)。名詞の限定形容詞の前に *as*, *how(ever)*, *so*, *too* を伴うときは *a* はその後: I am *as good a* man as he. / I knew *how great a* labour he had undertaken. / *So resolute an* attempt deserved success. (それほど果敢な試みは成功する値うちがあった)。*a so resolute attempt* も英語であるが, 気どった言い方 [MEU]. *too*

officialous *a* (または *a too officialous*) reply (あまりにも公式な返事) は、両者が混ざって *a too officialous a reply* となることもある [Nida]. (☞ TOO)

これらの場合以外に上のような語順を用いるのは誤りで、...which was quite sufficient *an* indication は *a quite* (or quite *a*) sufficient indication/Can anyone choose more glorious *an* exit? は *a more glorious exit*/...have before them far more brilliant *a* future は *a far more brilliant future* とすべきである [MEU]. また上のような語順の類推から時に不要の *a* が挿入されることがあるが、特に *no* の後に多い。No more signal (*a*) defeat was ever inflicted では *no* (=not *a*) であるから *a* は不要。一方 suffered *no less signal a* defeat では *no* は副詞であるからこの *a* はその前にあるべきである。The defendant was *no other* (*a*) person than Mr. Benjamin Disraeli でも *no other* (=not another) で *a* は不要 [MEU].

(5) *A* の出沒: (a) 次のような名詞も時に *a* を付けることがある。この場合の *a* は一般に具体的な 1 例・1 種または「ある」「…のような」など個別的な意味を表わす。人名にも *a* を付けて *A Mr. Adams is waiting to see you* のようにいうこともあるが、これは人の品位を傷つける言い方と感じられる [CAU]. He bought *a Rembrandt*. (レンブラントの絵を 1 枚買った)/*A Daniel* come to judgment!—Sh., *Merch. V. IV. i. 223* (ダニエルのような名裁判官だ)/*Temperance is a virtue*. (中庸は 1 種の美德)/He has done me *a kindness*. (親切な行ない)/He has *a knowledge* of Greek. (彼にはギリシア語の知識がある)/There was *a silence* between them.—Lawrence, *Women in Love* (しばしの沈黙)/Waiter, bring me *a coffee*! (コーヒーを 1 杯)/What *a moon*! (何という美しい月だろう)/There was *a hostility* between

them.—Lawrence, *Sons and Lovers* / Let me have *a look* at it. (ちょっと見せてください)/Bad sentences of this kind are caused by *a misunderstanding* of the modern English system of grammar.—Brown, *Forms in Mod. Eng.* // You thought yourself *a somebody*. (君は自分をひとかどの人物だと思っていた)/*A nothing* vexed him.—E. Brontë, *Wuthering Heights* (ちょっとした事で彼は腹を立てた)/You have *a something* in you loveable and worth preserving.—Stevenson, *Virginibus* (あなたは何かしらあいきょうがあり捨て難いものを持っている) [Jespersen, *M.E.G. II. § 8. 441 ff.*]. 特に形容詞を付けてその種類を限定する場合に多い: *I had a hasty* (or *light, simple, substantial*) *breakfast*. / Her hair was *a reddish brown*. / What *a terrible sky*! / *a pouring* (or *constant, heavy, cold, soft*) *rain* (cf. We shall have *rain*.) / This is *an excellent wine*. / There was *a long* (or *short, little*) *silence*. / This is *a genuine Masamune*. (本物の正宗の名刀) / This was *a delightful hearing*. (聞いて楽しいもの) / She felt *an unspeakable happiness*.—Gissing, *Cobwebs* / *a prophecy that a wonderful something* was about to take place—Thackeray, *Henry Esmond*. (何かすばらしいことが起こるという予言)。ただし前後関係により、あるいは語によって形容詞が付いていても *a* を付けないこともある: There was *absolute silence*.—Huxley, *New World* / He is in *acute financial difficulty*. (財政上非常に困難に陥っている) (cf. There is *a real difficulty*.) / in *fine* (or *cloudy, bad, foggy, pleasant*) *weather* / He is making *rapid* (or *remarkable, steady, tremendous, slow, very poor*) *progress*. 時に *progress* も *a* を付けて *I am ashamed that I am not able to make a quicker progress*—[OED] の

ようにいうこともあるが、a をとらないのが普通。ただし Every month has marked *a good progress*—[活用辞典] (毎月相当な進歩を遂げた)のように、a good, a great ではしばしば a をとることがある。この a は数量を表わす語とともに用いられる a few, a great many, a good many; a little, a certain の a と同じく量を表わす言い方であって、種別的な意味を表わすものではない [吉川美夫『英文法研究』III. 1. p. 41 ff.]: What you want is *a good* thrashing. (君に必要なのはうんとむち打たれることだ) / The lawyer had *a great* respect for it.—Burnett, *Fauntleroy* (弁護士はそれをひどく尊敬していた) / Her lips were closed with *a certain* firmness.—Gissing, *Cobwebs* (彼女の口はかなりしっかりと閉じられていた)。

散歩の意味の walk は go for *a walk* / take *a walk* のように a をとる。これに時間や距離を表わす修飾語を付けるときは、after *a four miles'* walk—Brontë / It was *a three-mile walk*—Hardy のように a を付けることもあり、within *ten minutes'* walk—[OED] / *Ten minutes'* brisk walk took us to the place—[大英和] (急ぎ足で10分歩くとその場所へ来た) のように a を付けないこともある: after *a two years'* absence—G. Eliot (2年ぶりに) / revisit Paris after *ten years'* absence—[活用辞典] (10年ぶりでパリを再訪する)。修飾語として前置詞句を伴う名詞に a を付ける場合もある: After *an absence* of twenty minutes, he returned.—[活用辞典] / There was *a silence* of a few moments.—Burnett / A full-grown man has *a weight* of ten stone upwards. (十分成長した男子は10ストーン以上の体重がある) / He was elected by *a majority* of 120 against 70.—[活用辞典] (彼は70票対120票の多数で当選した)。

(b) I caught (a) cold は, Jespersen

(*M.E.G.* VII. §12. 6₁) が Prof. Collinson の言葉として述べているところによれば、a のないときは自ら風邪をひく意味であり、a があるときは人からうつる意味であるという。動詞が have のときは He has *a* (bad, slight) cold のように a が付くのが普通。病名には a の付くもの、the の付くもの、無冠詞のものがあるが、a をとるものには次のようなものがある: I have *a headache* (or *toothache, stomachache, fever, cough, chill*)。

(c) What kind of (a) man is he? ㊦ KIND OF, SORT OF.

(d) With a pencil と in pencil: He wrote a letter *with a pencil* の pencil は道具としての鉛筆の意味で a を付けるが、There was also a note from Brenda, written *in pencil*.—Waugh, *Handful of Dust* (またブレンダからの手紙も置いてあり、それは鉛筆で書いてあった) の in pencil は 'in pencilled writing' (鉛筆書き) [OED] の意味で a を付けない。前者は書くという動作に即した表現であるのに対して、後者は書かれた状態に即した表現である。同様にして with *a piece of chalk* と in chalk, with (red) ink と in ink [宮田幸一『英語教育』VII. 6. p. 26].

(e) 2個以上の名詞が並列して用いられて同一人または単一の事物をさすときは、後の名詞の冠詞を省く: He is *a poet and statesman. / a watch and chain* (鎖付きの時計) / *a cup and saucer* (皿付きの茶碗)。しかし「A でありかつ B でもある」と特に強調しているときは、それぞれに冠詞を付けて He was *a pianist and a skilful painter*, too のようにいう。異なったものを表わす場合でも、意味にさしかえない限り、最初の名詞だけに冠詞を付けて後は省くことが多い: I gave him *a book, note-book, pen and pencil.* / I saw *a gentleman and lady* walking together. ただし紳士と淑女との対照に重きを